

令和3年度 あきたスマートカレッジ G講座内容報告

北条常久特別企画講座

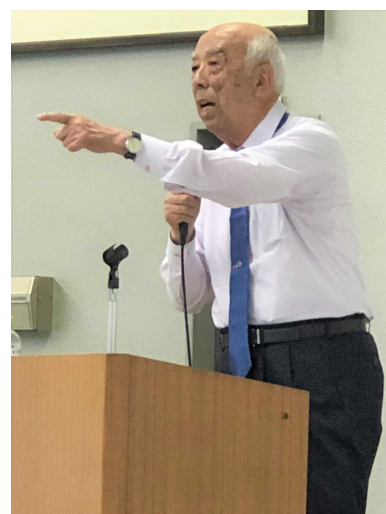
文学博士・北条常久が、高度成長と混乱の社会を駆け抜けた作家4人を取り上げます。作品を読み解き、各作家とその作品を取り巻く社会と時代背景を追求する講座です。

日 時			テ ー マ	講 師
G1	6/26	(土)	石原慎太郎とその時代 ～戦後派青年が躍動する～	秋田県生涯学習センター シニアコーディネーター 北 条 常 久
G2	8/21	(土)	大江健三郎の世界 ～消えぬ戦争の爪痕～	
G3	10/16	(土)	村上春樹の登場 ～日本文学の枠を超えて～	
G4	12/18	(土)	浅田次郎の大衆性 ～現代の大衆文学から時代を拓く～	

※G1講座の前には、開講宣言が行われました。

※G3講座では、特別ゲストに前・秋田県教育長 米田 進 様をお迎えしました。

G1 石原慎太郎氏略年譜、「太陽の季節」、「処刑の部屋」、「巷の神々」、「弟」、「湘南夫人」を主な項目として、講座が展開されました。講師は、石原氏を「戦後直後の世代」と位置づけました。戦争中に大人が強いた拘束的なモラルを打ち破り、目の前のものを信じて、何者にもぶつかりながら自由気ままに生きる新たな世代像が、戦後石原氏によって形作られたことを述べました。自分の生き方を作品に投影し、友情や愛情をどう考えたらいいのかを投げかけた氏は、人々に新たな時代・世界への憧れを与えたことに言及しました。また、石原氏兄弟の活躍が、映画・テレビの新時代を拓いたことや鎌倉・湘南を日本の消費世界の中心として流行させたことについてもふれ、一作家にとどまらない戦後日本における影響力の大きさを示唆していました。



G3 講師は、村上春樹氏略年譜、『ノルウェイの森』を、米田氏は、「ノルウェイの森」ジェイ・ルービンによる英語版を覗く、村上春樹「羊をめぐる冒険」についてを、主な項目として講座が展開されました。講師は、村上氏についての注目すべき点として、作品の底流には文学作品としてのあり方よりも宗教的な生死観を伴った精神のあり方が厚みをもって存在することや、学生時代には安保闘争といった学生運動にはのめりこまず、学生結婚やジャズ喫茶を開店するなど早くから自立の姿があったことを挙げました。ベストセラーで知られる『ノルウェイの森』には、こうした作家の人生観が織り込まれていることを述べたほか、男女の恋愛の描き方がこれまでの日本の小説にはないものだった点から本著は近代文学ではなく現代文学といえと考察し、私たちがもつ「生と死」といった問いを発している点が村上文学が現代文学といえる所以であることなどを指摘しました。米田氏は、ジェイ・ルービンによる英訳を題材に、日本語原文と英語訳における描写やニュアンスの比較・差異についての分析を話されました。また、村上氏の生死観についても着目され、「羊をめぐる冒険」にその転換点が認められることや『ノルウェイの森』の装丁色における赤＝生、緑＝死という特徴的表現についても考察を披露されました。両氏の話から、村上作品を読み解く上で、貴重な視点が得られた講座でありました。



関連図書コーナー設置 秋田県立図書館との連携で、「スマカレ関連図書コーナー」が、今年度も同図書館2階の閲覧室内に設置されました。講師の北条氏監修のもと、各回のテーマに関連する図書が一堂に取り揃えられました。受講にあたっての予習や受講後の自主学習にと、たくさんの御利用をいただきました。

